

# 異文化理解に焦点を当てた授業と評価

## －ケルン日本文化会館での実践から－

岩澤和宏（国際交流基金ケルン日本文化会館）

iwazawa@jki.de

沼崎邦子（元 同上）knumazaki@hotmail.co.jp

### 1. はじめに

言語教育はいつも政治/政策の影響を受ける。現在ヨーロッパの言語教育に最も大きい影響を与えているのは「外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠（以下、「CEFR」）である。CEFRは欧州外の言語である日本語にも確実に影響を与えつつある。これは避けて通ることもできるかもしれないが、教育行政的には日本語が欧州言語と同じ枠組みで扱える言語だということを示すチャンスでもある。国際交流基金ケルン日本文化会館（以下、「会館」）の日本語講座へのCEFRの影響は直接的ではないが、言語教育を巡る流れとしては後戻りすることはないだろうと考えられる。

これまでの海外/ドイツにおける日本語教育を振り返ってみると、完璧な言語を操る日本語ネイティブスピーカーと、日本語が不十分でいつもネイティブの助けを必要とする学習者を想定する場面が多かったように思える。「道聞き」「買物」などに典型的な例が見られる。日本語が不十分で情報も充分持っていない可哀想な外国人を、何でも知っていて何でも出来る親切な日本人が助けてあげる、或いは情報を提供するような場面だ。特に日本で出版された教科書を使う限り、そのような場面が出てくる傾向が強いように思われる。

だが、海外における日本語教育で、いつもそのパターンである必要があるのか？ 海外における日本語学習者は、後で日本に留学した際に困らないように準備しなければならないのか？ 全員が留学することを想定して学習を進めなければならないのか？ むしろ、ドイツに観光に来てドイツ語も英語もあまり上手ではなく、ちょっと困っている気の毒な日本人に助けの手を差し伸べる場面の方が現実的に役に立ち、且つ有意義な場面ではないか？

学習者が何を目標にしているのか、何が出来るようになるべきかについて再考の必要がある。特に一般社会人向けの日本語講座においては学習者が多様化している現在、到達目標を設定する際にも、学習動機やニーズ、学習に費やせる時間とエネルギーなど様々な面を考慮する必要がある。

言語教育を巡る以上の状況を踏まえた上で、本稿では、会館の日本語講座における異文化理解に焦点を当てた授業と評価についての実践報告を行う。

### 2. ケルン日本文化会館日本語講座の概要

1970年に設置された会館の日本語講座は38年の歴史を持つ一般社会人対象の夜間講座である。初級から上級までのクラスがあり、日本への留学や赴任が決まっていて早く日本語を習得したいという学習者がいると同時に、高齢化社会における趣味や教養としての日本語学習という面も併せ持つ。

1985年より国際交流基金（以下、「基金」）から日本語専門家が派遣されている。1990年より専門家2名体制となる。会館の日本語講座は、ドイツの日本語教育における拠点であると同時に、基金が開発を

進めている「JF日本語教育スタンダード」の初級レベルにおける「パイロット講座」という位置づけである。

会館の日本語講座が目指す能力は、端的に言えば①課題遂行能力と②異文化理解能力である。日本語を勉強して日本人のようになることを最終目標としている訳ではない。相互理解のための日本語であり、日本語使用者のコミュニケーションに資するものである。相互理解のための日本語とは発信する側と受ける側とが共同で課題を遂行することに繋がる。相互理解のための日本語を学ぶことは複数の言語や文化に触れて、また自分の言語や文化をより深く理解することと結び付く。日本語の知識や日本に関する情報は、課題遂行と異文化理解のための手段であると考えられる。

会館の日本語講座において、特に中級から上級のクラスにおいて扱う項目は、文化的コンテクストの理解が必須となるものが多いので、初級にもまして異文化理解能力が重要となってくる。

### 3. 中級クラスにおける実践（レベル7）

会館日本語講座のレベル7は、ドイツ語で「Stufe7」と呼ばれている。全部で9段階のレベルの中で、1～5が初級、6～8が中級、9が上級という大枠であるから、レベル7は、中級の中盤に位置している。初級の基礎力の上に中級の力をつけ、上級学習の入口まで到達できるよう、受講生を励ましながら、授業を行っている。

レベル7の授業では、主教材として『日本語中級 J301』（スリーエーネットワーク）、漢字の『Intermediate Kanji Book VOL.1』（凡人社）を使っている。2008年夏コースでは、それに副教材として『エリンが挑戦！にほんごできます』（国際交流基金）の中の“やってみよう”などの短いもの等を使用し、授業に最新の文化情報を取り入れようと努力した。

会館日本語講座では、基本的に1コース＝13週間をもって完了としている。2008年夏コースは3月下旬～6月の中旬で、レベル7ではその間、週2回（各回2時間）の頻度で授業が計24回行われた。25回目には口答試験、26回目には筆記試験となった。今期の登録者は7名で、全員が修了試験を受け、合格した。

添付資料1は、『日本語中級 J301』の Can Do リストである。このリストは、コース開始前に担当教師2名が、覚書として使用するため共同で作成した。初級の5つのレベルではコース開始時に、各レベル Can Do リストを学習者に配布したが、レベル7ではまだ渡していない。しかし、授業中の教師の発話によって、「この課では、“〇〇ができるようになる”ことが目標だ」ということを、繰り返し伝えた。特に異文化に関する Can Do は、『日本語中級 J301』を貫く Can Do だとの共通認識を持っているので、各回の授業で繰り返しその点を伝えた。また、会館日本語講座では、異文化理解能力を中級以上の重要な Can Do として位置づけている。このことから、『エリンが挑戦！にほんごできます』の“やってみよう”などの副教材を頻繁に使って、授業にこの要素をたくさん取り入れるようにしたわけである。

添付資料2は、2008年夏コースのレベル7の試験構成である。修了試験の内容は広範囲にわたっており、総合的な日本語の力を測っている。配点は、口頭試験＝15点、作文＝10点、聴解＝10点、文法・漢字（語彙）・読解＝65点で、総計100点とした。事前に予告し、説明を何回も行い、特に口頭試験については、よく準備するよう促した。また、各試験の課題が、レベル7の Can Do 「〇〇ができるようになる」に、それぞれ対応していることを説明した。

前述したように、2008年夏コースのレベル7の受講生は7名であったが、受講生の文化的背景はか

なり多様である。内訳は、1名がロシア人、1名が中国人で、残りの5名がドイツ人。また、5名のドイツ人の中で、1名は実母が日本人、1名は配偶者が日本人であった。かなり多文化な教室環境で、日本語が学習されていると言えるだろう。日本国内の教室現場では、“日本語が構成員の共通言語／コミュニケーション言語”となることは珍しくないが、海外では稀であり、多文化化が進んでいると言われるドイツでも、まだ非常に少ない。しかし、このクラスにはオーセンティックな日本語使用の場も僅かながら存在し、それは異文化理解に焦点を当てた授業を支える力ともなったようである。

課題遂行能力の評価としての口頭試験について、少し詳しく報告したい。課題は、「教師（試験官）の知らないことについて口頭発表（ストーリー・テリングを含む）を行い、試験官の口から『へえ』『なるほど』などの感嘆詞を出させる」または「不快なものも含む異文化体験を語り、それをどのよう咀嚼し整理したのか説明する」というものであった。以下は、各受講生が選んだテーマのリストである。

受講生 A：岐阜県にある物理学の実験装置（口頭発表）

受講生 B：熱帯魚グッピーの生態（口頭発表）

受講生 C：手土産にもらったケーキを食べなかった話（体験談の語り）

受講生 D：東京の電車の中で大笑いした話（体験談の語り）

受講生 E：他人を助けるときの心理（口頭発表）

受講生 F：ロシアの昔話一年寄りを大切にできなかった息子（ストーリー・テリング）

受講生 G：タコの知力（口頭発表）

一般社会人対象の講座であるから、受講生はそれぞれ職業や趣味の専門分野を持っている。したがって「教師（試験官）の知らないこと」という点では、全員から期待以上の興味深い内容の話を聞くことができた。例えば、受講生 A は、アインシュタインのノーベル物理学賞の受賞理由が、相対性理論ではなく光量子仮説にもとづく光電効果の理論化であったことを話した。『日本語中級 J 301』には「第1課 舌を出したアインシュタイン」があるが、報告者はこの課の授業中にアインシュタインについて誤った情報を伝えていたことが判り、反省させられた。

具体的に「日本語で〇〇が出来る」という目標と達成感、学習者を前向きにするようである。態度に覇気が出てくるような印象を与える。Can Do 記述が学習目標として明確になったことが、学習者の意識に、少なからず影響しているのではないだろうか。口頭試験は、それが達成できたのかどうか、結果として明確に見せてくれるので、影響が出やすいのではないかと考えている。

#### 4. 上級クラスにおける実践（レベル9）

上級クラスはレベル9（Stufe 9）と呼ばれるクラスである。開講期間はレベル7と同じだが、週に1度で合計13回の授業と試験が行われた。受講生は11名であった。

授業は文法や敬語やビジネス日本語の表現導入、漢字などもあるが、授業の中心になるのは生教材である。ニュースや悩み相談などについて、先ず内容を理解した後それについての意見やコメントを述べたり、クラスメートの意見やコメントに賛成・反対の意思表示をしたり、また討論したりする活動が中心になる。つまり、生教材を理解することはその後の活動の前提であり、ニュースや相談などに対してレスポンスがなければ、それを理解しなかったのと大差ないことになってしまう。

ニュースなどは、なるべく新鮮なもので話題性のあるものを使用するよう心掛けた。また、日本語で理解する必然性があるものが望ましい。このコースで扱ったものを列挙すると、「毒入り餃子」、「宮

崎死刑囚に対する死刑執行」、「小中学生の携帯電話禁止（教育再生懇談会答申）」「離婚後の300日問題（父親の確定と戸籍問題）」「沖縄での米軍の犯罪」などであり、いずれも日本語でコメントしたり討論したりするに値するニュースである。

ウェブサイトのニュースではコメントを記載したり同意を表明（投票）したりできるものがあるが、そのようなサイトをクラスで紹介し、興味のあるニュースにはクラスで反応するだけでなく、実際のサイト上でレスポンスするよう奨励している。

また、サイトの利用者がトピックを立てて悩み相談をしたり意見や助言を募ったりするものもあるが、それらにも自己責任でレスポンスするよう促している。

悩み相談に対するアドバイスなどにおいて、日本語ネイティブではないことや日本文化を充分理解できていないことは、必ずしもマイナスにはならない。むしろ自国の文化、ドイツの文化を踏まえた視点からのアドバイスの方が役に立つかもしれない。そこでは、正解を持った日本語ネイティブ指導者が教え導くという視点は全くない。

要は、テキストをどれだけ正確に理解できたかという視点ではなく、どれだけアウトカムを引き出せるかという視点で捉えている。その意味では将に「課題達成能力」と「異文化理解能力」が問われていると言える。

修了試験では口頭試験と総合日本語の筆記試験を行っている。口頭試験では印象に残ったニュースなどを口頭で説明する力やそれに対する意見やコメントをまとめて述べる能力を問い、総合日本語の筆記試験では、初めて見聞きするニュースを要約しそれについてのコメントを書くことが課題である。文法や表記、漢字のひとつひとつの正確さよりも、ニュースなどのメッセージを受け止めることができたかどうか、それに対してきちんと発信できたか、自身が持っている日本語力と日本文化理解力とを駆使して用が足せたかどうかを測るようにしている。

## 5. 課題と今後の展望

評価方法については今後の課題である。Can Do 記述にマークを付けて目標達成した項目とそうでなかった項目を明確にするべきだと考えられる。または、記述式で達成度の評価を把握できている限り正確に記すべきであろう。

実際には日本の「優・良・可・不可」のような評価を出しているが、それもこれまでの学習記録との比較という面では必要なことで、また学習者が望んでいるところでもある。

「異文化理解」度をどう評価するのかについては、未だ意見の一致を見ない。その評価をどう学習者に示すかについても意見の分かれるところである。

今後は、European Language Portfolio (ELP) なども参考にしながらポートフォリオの導入についても視野に入れ、学習の記録を学習者自身が振り返るといった観点から考察を進めていかなければならないと考えている。

### 参考文献：

Council of Europe(著) 吉島茂、大橋理枝（訳、編）（2004）『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』朝日出版社

岩澤和宏（1995）「「異文化」理解としての「会話」の授業」『第8回日本語教育連絡会議報告発表論文集』第8回日本語教育連絡会議事務局 pp. 19-25

岩澤和宏、沼崎邦子、古川嘉子、島田徳子（2008）「JF 日本語教育スタンダードと Can Do 記述—ケル  
ン日本文化会館における実践—」『2008 日本語教育シンポジウム—多文化共生の時代と日本語教育  
—』トルコ日本語教師会、ヨーロッパ日本語教師会 pp. 79-80

嘉数勝美（2006）「ヨーロッパの統合と日本語教育—CEF（「ヨーロッパ言語教育共通参照枠」）をめぐ  
って」『日本語学 vol.25』明治書院 pp. 46-58

『J 301』 Can-do一覧(L.6-L.10)

添付資料1 (JKI 2008 Sommer Stufe7)

機能的Can-do

| 課   | Can-do<br>(大目標) | 文化的／テーマ的Can-do  | 受入スキル                |  |  | 産出スキル                             |                                   |                            | 語彙類型  | 文型    |
|-----|-----------------|---|----------------------|--|--|-----------------------------------|-----------------------------------|----------------------------|---|-------|
|     |                 |   | リーディング<br>テキストタイプ    | リスニング<br>エッセイ<br>(主観的)                       | 読む<br>(文字言語)   | 聞く<br>(口頭言語)                      | ライティング<br>テキストタイプ<br>説明文<br>(客観的) | 書く<br>(文字言語)               |   |       |
| L6  | おばけと幽霊          | ・出自文化にある伝承文化的／民俗学的な内容を日本語で伝えることができる(お化け、言い伝え、迷信、慣習、祭り、食べ物、山や木や石など)  | エッセイ<br>説明文<br>(主観的) | ・事実と意見の判別ができる<br>・整理しながら要点が理解できる             | ・事実と意見の要点が理解できる<br>・感謝を表す会話<br>・話が理解できる<br>・感謝を表すスト<br>トラテジーが理解<br>できる | ライティング<br>テキストタイプ<br>説明文<br>(客観的) | ・何かの特性を正確かつ詳細に描写／説明<br>できる        | ・聞き伝えを正確<br>かつ詳細に説明<br>できる | 恐怖・怪奇・<br>不思議(オノ<br>マトペを含む)                     | 巻末リスト |
| L7  | お礼のことば          | ・出自文化にある言語的な特徴が説明できる<br>・日本語の学習経験を通して、自分の母語との相違点・類似点に気づくことができる。また、その相違点・類似点を日本語で説明できる                             | エッセイ<br>説明文<br>(主観的) | ・事実と意見の判別ができる<br>・整理しながら要点が理解できる             | ・事実と意見の要点が理解できる<br>・感謝を表す会話<br>・話が理解できる<br>・感謝を表すスト<br>トラテジーが理解<br>できる | ライティング<br>テキストタイプ<br>説明文<br>(客観的) | ・何かの特性を正確かつ詳細に描写／説明<br>できる        | ・聞き伝えを正確<br>かつ詳細に説明<br>できる | もてなす<br>・感謝<br>・日本文化背景                          | 巻末リスト |
| L8  | クジラと人間          | ・出自文化と日本文化との間に<br>にある食文化の違いに気づくことができる<br>・世界の食文化には、地理的に離れていても共通点がある<br>場合があることに気づく<br>・自分の知っている珍しい食べ物や料理について説明できる | 論説文<br>(客観的)         | ・事実と意見の判別ができる<br>・整理しながら要点が理解できる             | ・事実と意見の要点が理解できる<br>・感謝を表す会話<br>・話が理解できる<br>・感謝を表すスト<br>トラテジーが理解<br>できる | ライティング<br>テキストタイプ<br>説明文<br>(客観的) | ・何かの特性を正確かつ詳細に描写／説明<br>できる        | ・聞き伝えを正確<br>かつ詳細に説明<br>できる | 動物と人間<br>(捕鯨)<br>・議論(ダイス<br>カッション/<br>ダイアベートなど) | 巻末リスト |
| L9  | さるの視力           | ・実験の手順が説明できる<br>(心理学・化学・物理など)<br>・料理(郷土料理)の作り方が説明できる  | 報告文<br>論説文<br>(客観的)  | ・時間軸に沿った手順／方法やその結果を正確に理解できる<br>・結論を整理して理解できる | ・事実と意見の要点が理解できる<br>・感謝を表す会話<br>・話が理解できる<br>・感謝を表すスト<br>トラテジーが理解<br>できる | ライティング<br>テキストタイプ<br>説明文<br>(客観的) | ・何かの特性を正確かつ詳細に描写／説明<br>できる        | ・聞き伝えを正確<br>かつ詳細に説明<br>できる | 感覚<br>・色<br>・実験／調査<br>／研究                       | 巻末リスト |
| L10 | こどもの絵           | ・専門分野の入門書を読んで理解できる(学習理論・発達理論・言語習得理論など)  | 論説文<br>論述文<br>(客観的)  | ・時間軸に沿った手順／方法やその結果を正確に理解できる<br>・結論を整理して理解できる | ・事実と意見の要点が理解できる<br>・感謝を表す会話<br>・話が理解できる<br>・感謝を表すスト<br>トラテジーが理解<br>できる | ライティング<br>テキストタイプ<br>説明文<br>(客観的) | ・何かの特性を正確かつ詳細に描写／説明<br>できる        | ・聞き伝えを正確<br>かつ詳細に説明<br>できる | 芸術／学術<br>・視覚的印象                                 | 巻末リスト |

| 出題内容  | 出題範囲   | CanDo  |
|---|--|--|
| <p>&lt;文法・読解・漢字&gt; Rezeption [65点]</p> <p>A. 文法: 正しい表現・文型の選択 (20点)</p> <p>B. 読解 (30点)</p> <p>a. 事実と意見の判別</p> <p>b. 内容の成否の判別 (○×)</p> <p>c. 接続詞が含まれる文章の並べ替え</p> <p>B. 漢字 (15点)</p> <p>a. 同音異義語の選択</p> <p>b. 和語の意味を表す漢語の選択</p> <p>c. 漢字のダルーピング</p> | <p>J301: L6～10 Grammar Notes</p> <p>J301: L6, 7 (Q&amp;AのA・B記入の設問参照)</p> <p>J301: L8, 9, 10</p> <p>IKB: L5</p> <p>IKB: L3</p> <p>IKB: L1 (漢字はL1～復習1)</p> | <p>●読むこと</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>一般向けのテキストで書かれた説明文が理解できる</li> <li>接続詞を手がかりに文章の段落構成が理解できる</li> <li>多少複雑な文章の要点が理解できる</li> <li>多少複雑な文章の構成が理解できる</li> </ul> <p>(書き言葉特有の表現が使われた文章を理解できる)</p>   |
| <p>&lt;作文&gt; Produktion [10点]</p> <p>メモ・簡条書き (J301の「文章の型」を見ながら、接続詞を用いてひとまとまりの文章を再生する。</p>  | <p>J301: L9</p>  | <p>●書くこと</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>語彙や表現は不十分だが、伝えたい内容を書き表すことができる</li> <li>接続詞などを用いて、段落構成のある文章をなんとか書ける</li> <li>辞書を参考に正しい語彙を選択しようとする</li> <li>辞書を用い、れば、漢字仮名混じり文を書くことができる</li> </ul>  |
| <p>&lt;口頭&gt; Produktion [15点]</p> <p>A. 「だ・である体」の短い文章を「です・ます体」に直しながら音読する。</p> <p>B. 試験官の未知の情報について説明する(選択)</p> <p>* 実験／昔話／映画について、具体例や具体物を見せながら説明する。</p> <p>* 異文化経験について説明する</p> <p>C. B) についての質疑応答</p>   | <p>J301: L6</p> <p>J301: L6, 9</p> <p>J301: L7</p>   | <p>●話すこと</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「だ・である体」のテキストを黙読しながら、です・ます体で音読できる</li> <li>具象物や具体例を用いて、ひとまとまりの内容について説明できる</li> <li>言い方が分からない時に知っている語彙・表現などを用いて言い換えることができる</li> <li>(以下、選択)</li> <li>文化間における違いをふまえ、その背景や共通点を一般的な語彙を用いて話せる</li> <li>出自文化について一般的な語彙を用いて話せる</li> </ul> |
| <p>&lt;聴解&gt; Rezeption [10点]</p> <p>プレゼンテーションの要点把握 (○×)</p>  | <p>J301: L8</p>  | <p>●聞くこと</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>多少複雑なひとまとまりの内容から要点が理解できる</li> <li>一般向けのプレゼンテーションの意味が理解できる</li> <li>繰り返し聞くことにより発話内容が把握できる</li> <li>背景知識のある話題ならば、内容を概ね理解することができる</li> </ul>  |

|               |             | <b>Stufe 9</b>   |
|---------------|-------------|--|
| <b>理解すること</b> | <b>聞くこと</b> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 話題がある程度身近な範囲であれば、テレビのニュースを 1 度聞いて概要が理解できる。また、繰り返し視聴することにより、ほぼ理解できる。</li> <li>・ 背景知識があれば、時事問題のテレビ番組がほぼ理解できる。</li> <li>・ 長い会話や講義、議論を理解することが出来る。</li> <li>・ 日本文化を紹介する短いクリップを理解することが出来る。</li> </ul>                               |
|               | <b>読むこと</b> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 話題がある程度身近な範囲であれば、新聞記事を読んで概要が理解できる。また、辞書を使うなどして語彙を確認すれば、内容をほぼ完全に理解できる。</li> <li>・ 特殊な語彙や表現が使われていなければ、エッセイ、自己紹介、悩み相談などの文章を読んで内容をほぼ理解できる。</li> <li>・ 日本事情を紹介する短い文章を読んで、ほぼ内容を理解できる。</li> </ul>                                    |
| <b>話すこと</b>   | <b>やりとり</b> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 語彙や表現が多少不十分であっても、母語話者と自然に流暢に会話を進めることが出来る。</li> <li>・ 身近な話題の議論に参加し、自分の意見を説明したり、他人の意見に賛同したり反論したりできる。</li> <li>・ 会話や議論の中で、必要に応じてターンを取ることが出来る。</li> <li>・ 会話の中で適切に相槌が打てる。</li> <li>・ 「残念ですが」「お願いがあるんですが」などの前置きの表現が使える。</li> </ul> |
|               | <b>表現</b>   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 日本と比較しながらドイツの規則や習慣などを説明できる。</li> <li>・ 自分の意見を表明しながら他人にアドバイスができる。</li> <li>・ 時事問題について、ドイツと日本との違いに言及しながら自分の意見を述べる事が出来る。</li> </ul>  |
| <b>書くこと</b>   | <b>書くこと</b> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ニュースや時事問題などについてまとめたりコメントを書いたりすることが出来る。</li> <li>・ 他人へのアドバイスをまとめて書くことが出来る。</li> </ul>  |